

ねりまの文化財

文化財講座抄録

シルクへのあこがれ

東京農工大学繊維博物館 並木 寛 先生

(二月一〇日に実施した文化財講座の内容を文化財係の責任で抄録したものです)

本日は絹についてお話をしたい。絹は蚕の繭が原料である。絹は昆虫の巣を人間が衣料として使い出したユニークな繊維である。

蚕が繭を作るとき出す糸を繭糸と言う。現在は繭の品種改良が進み、一つの繭から一〇〇メートルから一五〇メートルの繭糸がとれるようになった。繭糸の表面にはセリシンという粘着力のある蛋白質が付いており、熱湯に入れてセリシンを溶かし、繭糸を七本から一〇本引きそろえ、一本の糸にしていく。このとき作られる糸を生糸と言ひ、繭糸から生糸を作り出す過程は座繰り、または(明治期以降は特に)製糸と呼ばれる。生糸に

は、まだ少しセリシンが付いているので絹になるとは思えないくらいゴワゴワしている。

セリシンをさらに溶かすため良く洗うと、生糸はセリシンがとれだんだん細くなっていく。この作業のことを「練る」と言ひ、生糸からセリシンを取り除いた糸は練糸と呼ばれる。この練糸から作られる繊維が絹である。ちなみに絹糸とは、繭糸・生糸・練糸などの総称である。

絹を作る技術は、紀元前三〇〇〇年頃中国で発見された。絹は生産するのが大変で他の繊維よりも光沢が良く高価なため、長い間庶民には縁がない繊維であった。日本で庶民が着用した繊維は、室町

委員会
課 教育係
区 社会文化財
社 練馬区豊玉北6-12-1
電話 3993-1111 内線7141
〒176

時代までは麻、それ以降は木綿であった。絹が上流階級に独占される一方、同じく繭を原料とする紬は庶民に使用された。穴あき繭や汚染繭などの屑繭を熱湯で煮るとセリシンが溶解

しマシユマロみたいになり、それを手で引き伸ばし紡いだ糸を紬糸と呼ぶ。この糸で織った繊維が紬で、養蚕農家の副業として各地で作られた。

話はかわるが、製糸の技術は六世紀頃には欧州へ伝播していた。西洋人には日本人以上に絹に対する憧れがあったようだ。ところが、一九世紀に欧州では蚕の伝染病が流行り、蚕が全滅してしまった。ちょうどこの頃、日本が開国し、欧州諸国は日本に生糸を求めた。ところが、日本の製糸レベルは低く、大量生産できない上、質的にも西洋人が求めるものと隔たりがあった。明治期になり日本人が渡欧するようになったとき、フランスのリヨンなどで機械を使って、質の良い生糸や絹を作っている事実を知り、日本のように幼稚な器械で生糸を作っていたのは対抗できないことに気がついた。そこで、明治政府はフランスの最新鋭の機械

を導入し、十数人のフランス人技師を招き、群馬県に官営の模範製糸工場を作った。これが富岡製糸場で、各藩は女工として藩士の子女を派遣し、製糸の技術を学ばせた。これにより製糸の技術は広がり、各地に機械製糸工場が設置された。その中心をなしたのが長野県の諏訪湖周辺であった。

明日皆さんが行かれる八王子市鏈水の絹の道資料館は、当時絹の集散地であった八王子から横浜港へ生糸を運んで行く途中にあり、この道を絹の道とよんだ。政府は群馬県から横浜港までの生糸の運搬の便をはかるため高崎線を開通させたが、民間ではこれより近道を取り、群馬



